

片山 享  
近藤 美奈子 編

新古今集校文書

牧野文庫本

古典文庫

片山 享  
近藤 美奈子 編

新古今集校定書

牧野文庫本

古典文庫

昭和六十二年三月二十日印刷発行 非売品

新古今集聞書  
牧野文庫本

編者 片山 藤美奈子 享

発行者 吉田 幸一

印刷者 白橋印刷所

発行所

114

東京都北区西ヶ原  
三ノ三四ノ一二

古典文庫

電話(九一〇)二七一七  
振替口座東京九・一四五九七番

# 目次

新古今集聞書 牧野文庫本……………一

○

解 說……………片山 享

新古今和歌集註……………一七三

新古今集聞書……………三〇



新古今集やま書

十景歌

十景の歌

栞文の歌

みづの野はらとて鹿の白き花ゆかりのちかみよはつたはらわ

け歌と二歌の巻及小をなげんは一首のり小歌号此の代

合有り初れみよとらゆかりのちかみよはつたはらわ

りんくよはつたはらわ初れりゆかりのちかみよはつたはらわ

ちかみよはつたはらわ初れりゆかりのちかみよはつたはらわ

ゆかりのちかみよはつたはらわ初れりゆかりのちかみよはつたはらわ

とらゆかりのちかみよはつたはらわ初れりゆかりのちかみよはつたはらわ

玉道小つたはらわ初れりゆかりのちかみよはつたはらわ

ゆかりのちかみよはつたはらわ初れりゆかりのちかみよはつたはらわ

ゆかりのちかみよはつたはらわ初れりゆかりのちかみよはつたはらわ

ゆかりのちかみよはつたはらわ初れりゆかりのちかみよはつたはらわ



## 凡 例

一、本書は、新城市教育委員会所管・牧野文庫本「新古今集聞書」を忠実に翻刻したものである。

二、翻刻に際しては次の方針によった。

1 漢字・仮名の別や仮名遣い等は、すべて底本のままとしたが、漢字の字体はおおむね通行字体に従った。

2 便宜上、各歌に通し番号を付した。

3 各歌の末尾括弧内に新編国歌大観歌番号を記した。

三、本書は翻刻を片山と近藤が、解説を片山が担当した。

四、翻刻を許可された新城市教育委員会に深謝申しあげる。

昭和六十二年二月七日

片山 享  
近藤 美奈子





新古今集聞書  
(牧野文庫本)



# 新古今集聞書

## 春歌上

春たつ心を

撰政太政大臣

一 みよし野は山も霞て白雪のふりにし里に春はきにけり(一)

此歌を一部の巻頭にをける心は此一首の内に題号の心を含めり、初の五もしよりにしさとゝいふまては古今の心也、春はきにけり新の字の心也、哥の心は吉野山は深山なから春のいたれるしに霞たな引なり、されとも深山なれば雪もふるなり、吉野はむかしは宮古なり、されはしら雪のふりにしさとゝ読り、此哥正直にして玉道たまみちに叶へり、余情尤かきりなし

式子内親王

二 山かふ。み春ともしらぬ松の戸にたえくかゝる雪のたま水(三)

山家の早春の心也、玉水とは雪消ておつる雫をいふなり、深山にて春ともしらぬ

を雪の玉水にて春をしると也

宮内卿

三 かきくらしなをふる里の雪のうちに跡こそ見えね春はきにけり(四)

跡とは人跡のことなり、春の跡にはあらず、雪のうちに人の跡こそ見えね春はきにけりとなり、とふ人もなきやとなれとくる春はやへむくらにもさはらさりけり

俊成卿

四 けふといへはもろこしまても行春をみやこにのみと思ひけるかな(五)

立春の心を読み、もろこしまてとは春のあまねくいたれるをいへり、しかるを都はかりとおもふ心は心せはきことぞと読ル

俊恵

五 春といへは霞にけりなきのふまで波間に見えしあはちしま山(六)

きのふまでは波まに見えしあはちしま山もけさは春のしるしに霞てほのかなると也、源氏須磨の巻に、たゝめのまへに見やらるゝはあはち嶋なりとあり、あさゆふに見れはこそあれすみよしのきしにむかへるあはち嶋山

六 岩間とちし氷もけきは解初て苔のした水道もとむなり(七)

同

道もとむらんとは岩間をとちし氷解初てたえくゝなかるゝをいふ也、大河などの  
はたはりひろき水ならばすくに流て道はもとむましきなり

国信

七 春日野ひした萌わたる草のうへにつれなく見ゆる春のあは雪(一〇)

残雪の心を読み、あは雪とは淡のやうなる雪也、消やすき雪をいへり、しかるを  
つれなく見ゆるといふことは下萌の若草のうへなれば淡雪をもつれなしとよめ  
り、見ゆる。侍はれはしかとつれなしといふにはかはるへし、又説、つれなきとい  
ふに二ツの心あり、一にはつよきこと一ツにはたくひなきことをいへり、此哥も  
若草のうへにあは雪のふりかゝりたるはたくひなくおもしろくみゆるともいふな  
り

赤人

八 あすからは若菜つまんとしめし野にきのふもけふも雪は降つゝ(一一)

しめし野とは領したること也、あすからは毎日つまむといふ心なり、きのふもけふもといふ<sup>に</sup>まで心得へし、さしあてゝあすつむといひさためたるにはあらさるへし

家隆

九 谷川のうち出る波も声たてつうくひすさそへ春の山風（一七）

古今の二首を引合てよむ哥なり、

谷川の解る氷のひまことに打出る波や春のはつ花、花の香を風のたよりにたくへてそ驚さそふしるへにはやる、谷川の氷もはや解て声をたて侍れはうくひすをもさそへと春の山風にいひかけたる哥也

仲実サネ

一〇 春きては花とも見よとかた岡の松の上葉に淡雪そふる（一九）

残る雪の心を読み、かた岡はちいさき岡をいへり、春きては花とも見よとは冬は雪を賞する物也、春はまた<sup>又</sup>花を賞する物なれば春は花とも見よと松の雪を賞して読み、又説、冬は雪の時にあふ世なり、春は花の時にあふ世なり、されは春にな

りては雪は時に逢さる物なれば時にあふ花とも見よとよめるといへり

二 卷向の檜原もいまたくもらねは小松かはらに淡雪そふる(二二〇)

まきもくの檜はら大和の名所なり、此哥に春の詞なし、いまたくもらぬといふを霞の心に読ルなり、余寒の躰也

読人不知

三 今さらに雪ふらめやもかけろふのもゆる春日と成にし物を(二二一)

かけろふといふに両説あり、一にはとんほうといふむしなり、又いとゆふなとて見れば空にちらくくとみゆるをいふ也、陽煙ヤウエンといふなり、両説いつれもよし、此哥もゆる春とあれは陽煙のことなり、さてもゆる春日と成にし物を今更雪はふらしとおもへは雪のふるよと読ルなり

通光

三 みしま江や霜もまたひぬ芦の葉につのくむほとの春風そふく(二二五)

水ノ郷春望といふ題也、三嶋江津の国なり、つのくむとは芦のもえ出る初めはうしのつのなどのやうなるを云也、あしの霜もひぬにはや陽氣をえて芦のつのくむ



ほととの春風ふくとなり、まこも草つのくみわたる沢辺にはつなかね駒もはなれさりけりとも読り、詞花集の哥也

秀能

四 夕月夜塩みちくらし難波江の芦の若葉にこゆる白波（二六）

夕月夜とは四日ころより十二三日までの月をいへり、此しら波を大なる波と心えてはあしきなり、芦の若葉なれば白波もそつとこゆるやうなるとなり

又説、芦の若葉に露けきゆふへの月のうつりたるをしら波のこゆるやうなるとみたてたる哥なり、塩みちくらしとは塩かみちきて波のこゆるかとなり

西行

五 ふりつみし高ねのみ雪解にけり清滝川の水のしら波（二七）

清滝は醍醐高尾とがの尾のふもととなり、水のしら波のなかるゝは三所の高ねの雪ことくく消たれはこそなかるらんといふ心なり、けりといふにあたりて見るへし、此哥を定家卿は清といふ字を読あましたる哥と難せられたり、中院の御哥に、千くま川春行水はすみにけり消ていくかの嶺の白雪とあそはされたるを此哥には